

タイトル	中国語の量詞の分類について：日本語の助数詞と比較して
著者	买买提，力提甫
引用	北海学園大学学園論集，119：113-131
発行日	2004-03-25

中国語の量詞の分類について

—— 日本語の助数詞と比較して ——

買 買 提 力 提 甫

目 次

1. はじめに
2. 品詞論における量詞の位置
3. 中国語量詞の分類
4. 日本語助数詞の分類
5. まとめ

1. はじめに

「助数詞は、数を表わす語（基数詞）に添えて、それがどのような事物（対象）の数量であるかを示す接尾語の一種である。その事物に対する認識の方法やそれぞれの形態的特徴の形象化などは、時代や状況により、また、人や民族等によって相違するかもしれない。あるいは、逆に状況や民族を超えて共通することもあるかもしれない。助数詞には、そうした認識や心性のやり方が投影されており、ここにその研究意識が認められるのである。」¹⁾

中国語でいう「量詞」は、インド・ヨーロッパ諸語に比べて、中国語の中で最も特徴のある品詞である。それゆえ、現代中国における量詞、特に個体量詞の方は、方言を使って普通語（標準語）を学ぶ中国人ないし中国語と違った言葉を使う少数民族の人々にとって、一つの学習する難点となっている。したがって、中国語を学ぶ外国人にとっても、必ず突破しなければならない難関である。

中国語において量詞とは、人・事物や、動作・行為の単位を表わすことばである。量詞、あるいはそれに似たようなものは、中国語、日本語、朝鮮語、ベトナム語など東アジア諸国に共通にみられる。したがって、数多くの学者の間で、日本語でも、助数詞が非常に発達しているので、日本語の助数詞が中国の量詞に等しいといわれている。はたして、日本語の助数詞は中国語の量

1) 三保忠夫『日本助数詞の歴史的研究』風間書房、2000年、1頁。

詞と全く同じものであろうか、それとも相違するものなのか。本稿は、このような問題を踏まえて、主に語彙論、品詞論、文構造などの面で中国語の量詞と日本語の助数詞との分類から、それらを比較対照しながら、両国の数量表現における差異を究明しようとした試みである。

2. 品詞論における量詞の位置

「品詞」と言う術語は、ギリシア・ラテン語 *partes orationis* の訳語である。中国でも西洋文法学に対する研究が進展し、中国語の文法学はその影響を直接受け、品詞論の構成も、ギリシア・ラテン文法の枠組みに従って形成され、発展してきた。日本語の国文法も同じ道を辿ってきたといえよう。

語をいくつの品詞に分けるか、またその品詞をどのような名称で呼ぶかは、学者たちの間でも、語彙論を中心にしてみるか、文構造における構文的役割を中心にしてみるか、それとも両方を総合的にみるかによって、それぞれ考え方が違う。

1898年に、馬建忠によって第1部中国語文法書『馬氏文通』が誕生した。当時、中国は西洋文法学をモデルにして、中国語の文法体系を作り上げた。馬建忠はインド・ヨーロッパ諸語との共通性から、まず中国語の品詞を名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、介詞、連詞、感嘆詞を立て、そのほかに中国語に特有の助詞を加えて、9類に分けた。『馬氏文通』には数詞も、量詞も立てられなかった。しかし、彼は「量詞」が一般の名詞であると主張しながら、量詞に記数の「別称」²⁾と名づけて、初めて量詞に言及した。

1924年、黎錦熙は『新著国語文法』のなかで、「量詞の種類がイコール国語の特徴である」、「量詞が数量を表わす名詞で、数詞の後ろに付けられ、事物の数を計算する時に事物の数量単位として用いられる」と指摘した³⁾。しかし、黎錦熙も品詞上で量詞に独立した地位を与えなかった。彼は、馬建忠と同じように中国語の品詞を名詞、代名詞、動詞、形容詞、副詞、介詞、連詞、助詞、感嘆詞の9類に分けた。黎錦熙は、品詞上で量詞に独立した地位を与えなかったけれども、最初に量詞という名称を打ち出し、かつ量詞研究の重要性を強調したこのことの意義は非常に大きい。

1943年に発表された『中国現代語法』のなかで、王力は中国語の品詞を名詞、数詞、形容詞、動詞、副詞、代名詞、系詞、連結詞、語気詞、記号の10類に分けた。王力は、「数を表わす詞が数詞と呼ばれる」と指摘し、黎錦熙と違って、品詞上で数詞に独立した地位を与えた。量詞について、彼は「名詞の中で、人物の数の単位、あるいは行為の回数を示さないものが単位名詞と呼ばれる」⁴⁾と強調した。つまり、王力は、品詞上で量詞を名詞のなかの一部類とみて独立した地位を与えることには賛同しなかったが、「単位名詞」という術語を提出したのである。

2) 「故凡物之公命有別称以記数者，如車乘馬匹之類，必先之」馬建忠『馬氏文通』，商務印書館，1983年，34頁。

3) 黎錦熙『新著国語文法』，商務印書館，1992年，81頁。

4) 王力『中国現代語法』，商務印書館，1985年，214頁。

1940年代に出版された『中国文法要略』のなかで、呂叔湘は「白話においては、名詞の前に直接数詞を付けることができず、その真中に一つの単位詞を入れなければならない」⁵⁾と指摘し、量詞を指し呼び詞の類に入れ、「単位詞」と呼んだ。その後の『語法学習』において、彼は量詞を名詞の付属類として、「副名詞」と名づけた。彼は「副名詞は事物、あるいは行為の単位を表示し、または「単位詞」あるいは「量詞」と称する。それは名詞であるが、名詞とちょっと違う。一般的に、数詞を名詞に直接くっ付けることができず、真中に一つの副名詞を入れなければならない。副名詞はいつも数詞と一緒に接合され、かつ多くの副名詞自身には中身はなく、一般的な名詞が有する具体的意義を持たない」⁶⁾と指摘し、量詞と名詞との区別、または量詞の数詞との接続関係における文法特徴までに言及した。しかし、中国語の品詞を名詞、動詞、形容詞、代名詞、副詞、接続詞、語気詞、象声詞（擬声語）の8類に分け、これまでの研究者と同様に量詞を独立した品詞と認めなかった。

その後も、高名凱、陸志韋、陳望道、丁声樹などの有名な中国語文法学者により、量詞についての論争が1950年代半ばまで続いた。

1954年から1956年までの間に編集された『暫擬漢語教學語法系統簡述』は、「量詞は事物、あるいは動作の数量単位を表す詞である。量詞には2種類あり、実体の事物を計算するのが物量詞で、行為・動作を計算するのが動量詞である」と量詞に正式に独立した地位を与え、かつ明確にそれを定義した。こうして、中国語の品詞は名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞、介詞、連詞、代名詞、語気詞（感嘆詞）、数詞、量詞との11類に分類された。以降、量詞も中国語の品詞系統のなかで独立した品詞となり、量詞という名称も固定しはじめた。

1961年、朱德熙は北京大学の現代中国語文法講座で、量詞を正式に中国語の品詞類の中に組み込み、「量詞は数詞の後ろに置くことができる粘着詞である」と量詞に明確な定義を与えた。しかし、量詞という名称が人々に受け入れられるのに1970年代まで論争が続いた。

1979年、郭紹虞は『漢語語法修飾新探』のなかで、「われわれは単位という名称を完全に否定しない。しかし、量詞という名称に比べれば、これにはまだ包括できない部分がある。これは標準量と非標準量との区別である。私は以前それを數位詞と称したことも、単位の意味に傾いたからで、いまは、放棄して數位詞という名称を使わない。…何故なら、量詞は単位詞を概括できるが、逆に単位詞は量詞を概括できないからである。これは明白な事実である」⁷⁾と、量詞の名称について完全な論述をした。これで量詞命名の論争も一応収まった。

日本語の近代文法論の品詞論においては、橋本説、時枝説、山田説などがある。橋本進吉は、「体言の中で数を表わすもの。『一』『二人』『三匹』『四つ』『五番目』など。また数詞を『物価は

5) 呂叔湘『中国文法要略』，商務印書館，1982年，18頁。

6) 呂叔湘『語法學習』，中国青年出版社，1953年，6頁。

7) 郭紹虞『中国語語法修飾新探』（上冊），商務印書館，1979年，276頁。

二割上がった』『三年間苦労を続けた』のように副詞的に用いることもある」⁸⁾と指摘し、数詞と名付けた。また彼は『国語法要説』において、文節論の立場から、単独で一文節をなし得るもの(独立語)となし得ないもの(付属語)とに二大別し、活用の有無、主語と成るか述語と成るか、修飾語と成るか成らないかによって、名詞、代名詞、数詞などをそれぞれ一品詞として分けて考えた。その結果、日本語の品詞を動詞、形容詞、形容動詞、名詞、代名詞、数詞、副詞、副体詞、接続詞、感動詞、助動詞、助詞の12種に分類した。

時枝誠紀は「体言のうちで、数量や順序を表わす『一つ』『二人』『三匹』『四番目』などを、便宜上、数詞と呼ぶことはあるが、正式の品詞名として用いない。」⁹⁾として、品詞名として数詞を認めず、日本語の品詞を名詞、代名詞、連体詞、副詞、動詞、形容詞、助詞、数詞、助動詞、感動詞、接続詞の11種に分類した。

山田孝雄は、「体言のうち、数量をはかり、または、順序を数えるのに用いる語。数詞は、数量の名目でなく、『かぞえ』または『はかる』作用を表わす語である。この中には、『一』『二』『三』など一定の数量をいうもののほか、『あまた』『すこし』『いくつ』のような不定の数量をいうものもはいる」として、数詞についてより詳しく説明した¹⁰⁾。数詞には、「かぞえる」、「はかる」という「思想上の作用」が根底にあることを重視し、数詞を名詞、代名詞に並ぶ独立の品詞として、日本語の品詞を名詞、代名詞、数詞、形容詞、動詞、存在詞、副詞、助詞の8種に分類した。

数詞に副詞的用法のあることが名詞と区別すべき根拠とされることが多いが、その点は「去年、あした」など時を表わす名詞も同様で、あえて名詞から独立させる必要がないという説がむしろ強い。昭和10年代の末、文部省は国定教科書『中等文法』を編集した際、『新文典』(橋本進吉)と『国語法要説』とを基礎にして、品詞を分類した。『中等文法』は、数詞、代名詞を名詞の下位に入れ、形容動詞を立てて¹¹⁾、10品詞説とした。こうした考え方が戦後の教育において普及したと思われる。

現在のところ、日本語の品詞としては、およそ10種類前後のものが認められている。学校文法で一般に行われている品詞分類としては、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞、助詞、助動詞の10種類である¹²⁾。日本の品詞論は、西洋文法の影響を受けて成長した結果、いまだ若干の混迷を残していると思われる。

ここで、現在一般的に行われている中国語の品詞分類と日本語の品詞分類を比較してみる。中国語の品詞分類は、名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞、介詞、連詞、代名詞、語気詞(感嘆詞)、数詞、量詞の11類である。これに対して、日本語の品詞分類は、名詞、動詞、形容詞、形容動詞、

8) 松村明『日本文法大辞典』明治書院、昭和46年、992頁。

9) 前掲。『日本文法大辞典』、992頁。

10) 前掲。『日本文法大辞典』、992頁。

11) 林 巨樹「品詞」『国語学研究事典』、明治書院、昭和58年、331頁～332頁。

12) 前掲。『日本文法大辞典』、712頁～716頁。

副詞，連体詞，接続詞，感動詞，助詞，助動詞の 10 種類である。

つまり，中国語の品詞分類には，量詞が独立した品詞として存在しているのに対して，日本語の品詞分類は，助数詞を独立した品詞として立てていないことが分かる。それでは，助数詞は一体どの品詞のなかに属されているのであろうか。

日本語の助数詞を中国語の量詞と比較可能にするには，まず，中国語量詞の下位分類を調べてみる必要がある。

3. 中国語量詞の分類

既に述べたように，量詞を独立した品詞にするか，それともしないかということをめぐる論争が半世紀も続き，1970 年代になって量詞はようやく人々に受け入れられた。量詞の下位分類も同じように，語彙論を中心にしてみるか，文構造における構文的役割を中心にしてみるか，それとも両方を総合的にみるかによって，それぞれ考え方が違っている。

朱徳熙は『語法講義』のなかで，量詞を(1)個体量詞，(2)集合量詞，(3)度量詞，(4)不定量詞，(5)臨時量詞，(6)準量詞，(7)動量詞との 7 種に分け，7 番の動量詞をさらに専用動量詞，名詞を借用した動量詞，動詞の重ねからなる動量詞の 3 種に分けた。

① 専用動量詞としては，「洗一下（一回洗う），去一趟（一度行く），看一次（一度見る），叫一声（一声かける），睡一觉（一眠りする），念一遍（一度読む）」などの例がある。

② 名詞を借用した動量詞としては，「放一枪（銃で一発撃つ），切一刀（刃物で一切りする），抽一鞭（鞭で一発打つ），洗一水（水で一辺洗う），踢一脚（足で一蹴りする），看一眼（一目見る）」などの例がある。

③ 動詞の重ねからなる動量詞としては，「看一看（ちょっと見る），想一想（ちょっと考える），歇一歇（ちょっと休む）」などの例がある。

この他に，朱徳熙は，「臨時量詞が名詞を借用して量詞として用いられる」という定義を臨時量詞に与え，数量連語「一个碗，一个口袋，一个书架」の中の名詞「碗，口袋，书架」を，その名詞を借用して成した臨時量詞（一碗饭，一口袋面，一书架书）と比較し，臨時量詞について，詳しい説明を行った。すなわち，「一桌子土」，「一脸汗」，「一脚泥」の「桌子，脸，脚」も「碗，口袋，书架」と同じように臨時量詞である。しかし，第 1 に「一桌子土」が「一碗饭」と違い，「一桌子土」の意味が，「テーブルいっぱいの塵」を意味するが，「一碗饭」が「満杯のご飯」を意味しない。第 2 に，「一碗饭」の数「一」を他の数（例えば，二，三，四…）に入れ替えることができるが，「一桌子土」の「一」を他の数に入れ替えることはできない。第 3 に，「一桌子土」を「一桌子的土」と言えるが，「一碗」と「饭」との間に「的」を入れることができない。つまり，「一碗的饭」とは言えない。そのために，「一屋子书」が二つの意味を表わし，ある時は「两屋子书」，「三屋子书」に対しての言い方，つまり，「一部屋の本」という意味を表わし，ある時は「一屋子书」が「満屋子书」と同じ意味で，「部屋いっぱいの本」という意味を表わす。もし「一屋子书」

が前者の意味であれば、「的」を入れることができない。後者の場合であれば、「的」を入れることができる。

朱德熙は「県, 站, 世紀」を準量詞とみなしている。準量詞について, 彼は「两个县を两县と言えるし, 三个站を三站と, 一个世纪を一世紀と言えるから, 两个县, 三个站, 一个世纪の〈县, 站, 世纪〉は明らかに名詞である。〈两县, 三站, 一世紀〉の〈县, 站, 世纪〉を名詞とみても良いし, 量詞とみてもよい。われわれからみれば, 量詞とみなした方が合理的だ」¹³⁾と解釈している。

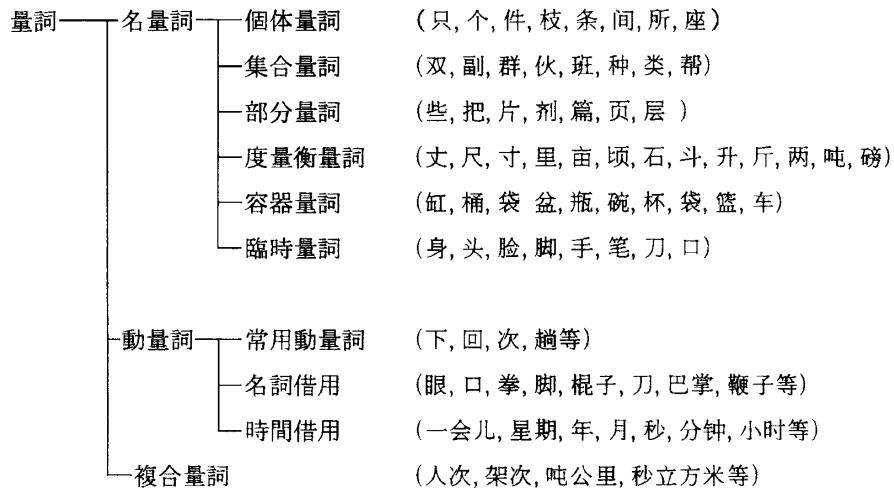


図1 張志公における量詞の下位分類

呂叔湘は『現代漢語八百詞』で, 量詞を(1)個体量詞, (2)集合量詞, (3)部分量詞, (4)容器量詞, (5)臨時量詞, (6)度量衡量詞, (7)自主量詞, (8)動量詞, (9)複合量詞との9種に分け, 特に, 自主量詞について, 彼は「『国, 省, 区, 县, 科, 系, 年, 月, 周』などは量詞に入らない一種の特殊な名詞である」¹⁴⁾と強調した。

黎錦熙と劉世儒は『漢語語法教材』で, 量詞を名詞の附類として, 名詞に付加するものを「名量詞」(例えば, 一个人, 肉三斤), 動詞に付加するものを動量詞(例えば, 一下笑了, 去过两次), 形容詞に付加するものを形量詞(例え, 两斤重, 一丈长, 重两斤, 高五尺)と3種に区分した¹⁵⁾。

張志公は『現代漢語』で第1次分類として, 量詞を「名量詞, 動量詞, 複合量詞」に区分して, さらに2次分類と3次分類を行った¹⁶⁾。整理すると図1のようになる。劉月華・潘文娛等は『現代中国語文法総覧』のなかで, まず量詞を以下のように名量詞と動量詞に大別して, さらに2次分類, 3次分類を行った。つまり, 名量詞を専用量詞(さらに個体量詞, 集合量詞, 度量衡詞, 不

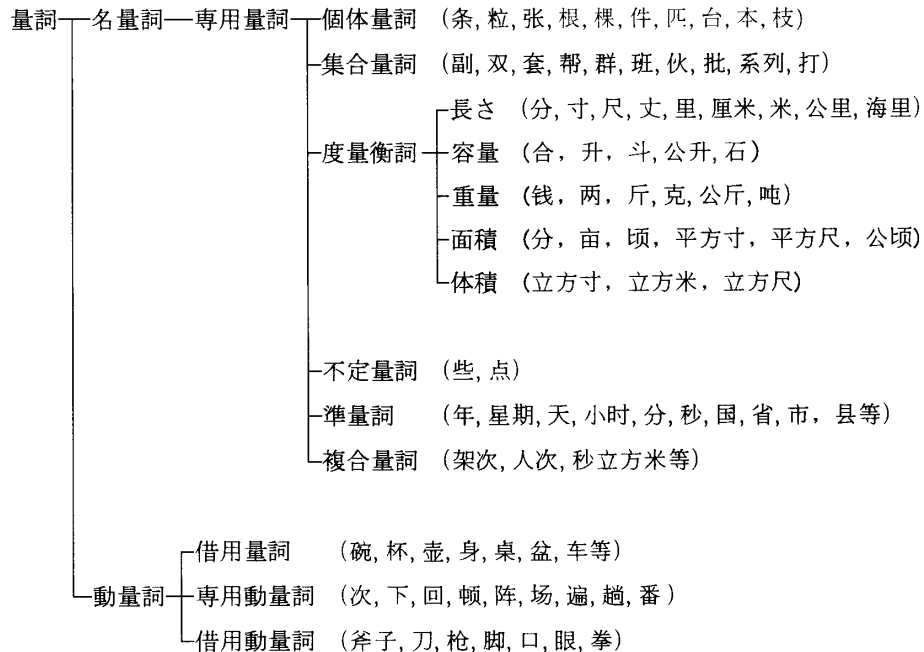
13) 朱德熙『語法講義』, 商務印書館, 2000年, 49頁～51頁。

14) 呂叔湘『現代漢語八百詞』, 商務印書館, 1980年, 8頁。

15) 黎錦熙, 劉世儒『中国語語法教材』(第二篇), 商務印書館, 1959年, 43頁。

16) 張志公主編『現代漢語』, 人民出版社, 1982年, 180頁。

定量詞，準量詞，複合量詞）と，借用量詞に分けた。動量詞も専用動量詞と借用動量詞に区分した¹⁷⁾。本稿ではそれを図2のように整理した。



出所：劉月華等『實用現代漢語語法』，商務印書館，2001年，129頁～136頁を参考にして作成。

図2 劉月華・潘文娛等における量詞の下位分類

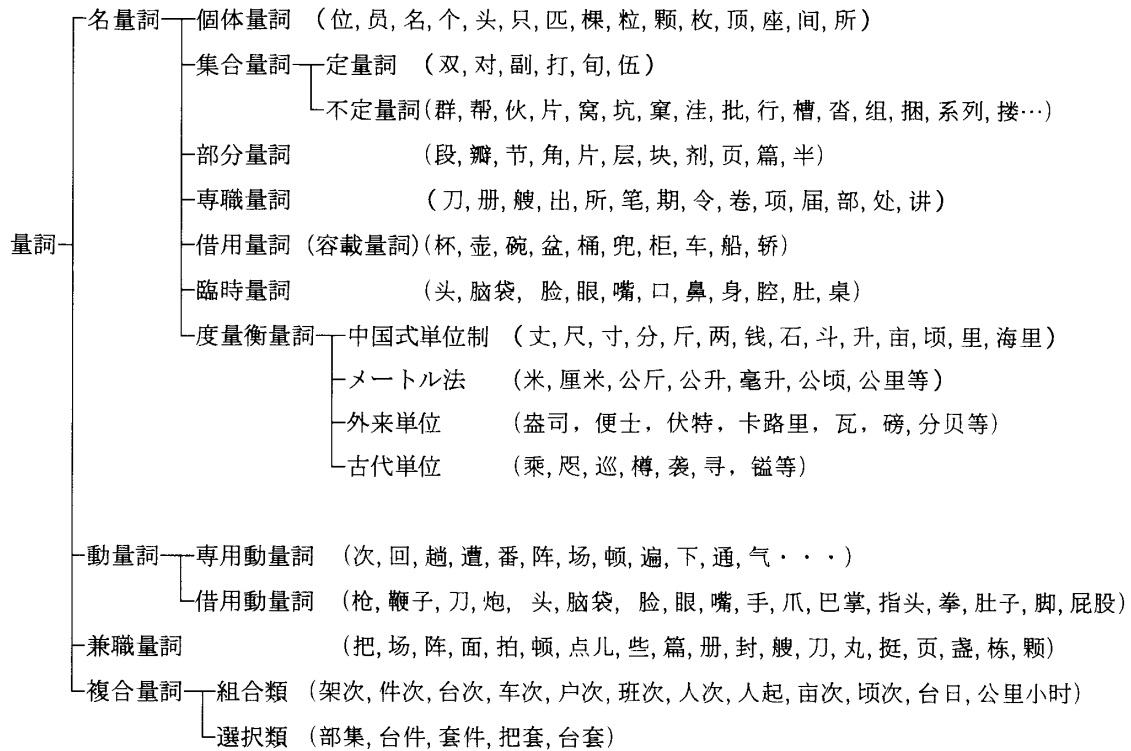
何傑は、長年中国語教育と研究に携わり、中国語の文法研究で数多くの研究成果を獲得した。特に、研究の焦点を中国語文法における量詞に絞り、15年の歳月を費やして、中国文法研究における先人および当代の賢者の研究成果を検討し、吸収して、新しい観点から次のように指摘した。すなわち、「量詞の内部再分類が複雑な問題である。量詞の語義成分が複雑で、文法上役割の特徴も難しく、語義も、文法上役割也多岐にわたる。量詞は数詞の後ろに置ける粘着詞なので、量詞自身、または自分と同じ次元の名詞、動詞、形容詞と一緒に直接その分類を規定する。量詞の2次分類，3次分類も文構造から切り離すことができないことから、詞の文法上の役割がその下位分類を区分する主要な基準となる。詞の文法的機能は多方面から語義の制約を受け、詞の語義的範疇と文法的範疇は緊密に関係し、品詞の分類に影響する要素も多方面に及ぶ。そのため、量詞の下位分類では詞の文法的機能を主要基準にすると同時に、詞の意義およびそれと関連する要素も考慮しなければならない」¹⁸⁾。

また、何傑は、張志公が語源と語の発展および変化から借用量詞と臨時量詞を立てたことに関

17) 劉月華等『實用現代漢語語法』，商務印書館，2001年，129頁～136頁。

18) 何傑『現代漢語量詞研究』，民族出版社，2000年，29頁。

連して、「身、頭、臉、脚、手、筆、刀、口」などを臨時量詞に組み込むのは討議に値をする問題であろうと指摘し、「身、頭、臉、脚、手、筆、刀、口」などを別の違う類に組み込むべきではなかろうかと異議を顕にした。劉月華などの個体量詞、集合量詞、不定量詞などを専用量詞に組み込んだことに対して、それが相対的に借用という観点から、使用機能だけを分類の根拠にすることに疑問をはさみ、図3のような下位分類を行った¹⁹⁾。



出所：何傑『現代漢語量詞研究』，民族出版社，2000年，30頁～54頁を参考にして作成。

図3 何傑における量詞の下位分類

確かに、量詞は語義成分が複雑で、量詞の文法機能も多方面から語義の制約を受ける。そのため、量詞の分類を語彙論的な面から注目することが多い。しかし、量詞は語義的範疇と文法的範疇において緊密な関係にあるので、その文法的機能を見捨てることはできない。例えば、「架次」の「架」は「支えのついたものや機械装置のあるものを数える」名量詞（名詞にともなう量詞）で、「次」は「繰り返し現れる事物、繰り返し行われる動作の回数」を表わす動量詞（動詞にともなう量詞）である。つまり、「架」と「次」を組み合わせた「架次」は名量詞でもなければ、動量詞でもない。「人次」もまったく同じであるが、それと同じように、個体量詞と動量詞の組合せとして「车次、輛次、列次、門次、件次、台次、站次、艘次…」などがある。劉月華等が「架次、人次」を名量詞の下位分類の専用量詞に入れたのは、量詞分類で混乱を引き起こすことになったと考えられる。

19) 前掲。『現代漢語量詞研究』，16～20頁。

また、「场次」の「场」がスポーツ・演劇・映画などの上演回数を数える動量詞で、「次」と組み合わせると、動量詞と動量詞の組合せとなるため、「场次」は名量詞にはならないであろう。「场次」をどういう類に帰納すれば、よいのであろうか。「秒立方米」の「秒」が時間を表わす名量詞であるが、「他想了几秒钟」（彼は何秒か考えた）の時には、「秒」は動量詞にもなれる。「立方米」（立方メートル）が容積を表わす名量詞で、「秒」と「立方米」を組み合わせた「秒立方米」が名量詞と名量との組合せとみなすことができる。例えば、「顿公里，人公里，千米小时，台日，箱班…」などのものも「秒立方米」に似て、中国語では数多く存在している。一方、「班次，户次，部次，卷次…」，「人次，人起」，「亩次，顷次」のような名量詞と動量詞との組合せも多数存在している。このような異なるパターンを名量詞とみなすことは、混乱が起きやすい。やはりこれらを統一して「複合量詞」に組み込んだ方が、最も合理的であると思われる。

何傑は、量詞の下位分類においては丹念緻密で、考えの筋道もはっきりしている。何傑は、名量詞の下位分類に専職量詞を設けており、その具体的な例として、（刀，冊，艘，出，所，笔，期，令，卷，项，届，部，处，讲）を列举している。彼女は「専職量詞」に対して、「専職量詞が使用機能から見て、ある客観的事物の数を計算したり、表わしたりするために使われ、ほかの機能を有しないことから、専職量詞と呼ぶ。専職量詞は名詞と固定された組合せの関係にあるから、その使用範囲は狭い」²⁰⁾という定義を与えた。

筆者としては、「専職量詞」を設ける必要がないと考えている。ここで、上述した「専職量詞」の例について、一つ一つ検討して議論をしたい。

例えば、「一头牛」，「一只羊」を「一匹牛」，「一匹羊」と言わない。何故なら、「牛」を「头」で、「羊」を「只」（隻）で数えることが特定されており、「匹」が「牛」，「羊」ではなく、「馬」を数える時にしか用いられない。

①冊は、「这套书一共六册」（この本は全部で6冊です）のように、書籍をセットで数えるときにしか使われない名量詞である。②艘は、「五艘大船」（大船5隻），「一〇艘军舰」（軍艦10隻）のように、船・戦艦のみを数える名量詞である。③出は、古代に「与谢孝剧谈一出」（謝孝と劇について話を一場取った）のように、行為・動さの全過程を表わす動量詞として使われたが、今は主に「三出戏」（三つの芝居）のように、名量詞として、戯曲・演劇の回数（一区切り）を指す。④所は、名量詞として家屋・花園・学校・商店・寺院を数える。⑤笔は、「这有两笔帐没算呢」（まだ二口清算が済んでいない）のように、金銭や金銭と関係のあるものを表わし、または「一笔好字」（立派な字）のように、書画に対する能力を表わす名量詞である。⑥项は、名量詞で、項目に分けた物を数え、1)「一项公报」（一つのコミュニケ），「第二款第五项」（第2款第5項）のように、条例，表，文書に用いる。2)「一项议程」（一つの議事）のように、任務，議事，措置・プロジェクトなどに用いる。3)「一项交易」（一つの取引）のように、取引，金銭に関係ある事物に用

20) 前掲。『現代漢語量詞研究』，36頁。

いる。4)「一项运动」(一種目のスポーツ)のように、体育活動に用いる。⑦「届」は、「第三届全国人民表大会」(第3期全国人民代表大会)、「第二届毕业生」(2期の卒業生)のように、定期会議や卒業の年度を数える名量詞である。⑧「部」は、名量詞で、「两部字典」(字典2冊)、「一部记录片」(記録映画一本)のように、書籍・映画フィルム、または「一部机器」(機械1台)、「两部汽车」(自動車2台)のように、機械や車両を数える。⑨「处」は、名量詞で、「两处名胜」(名勝地2ヶ所)、「身上五处受伤」(体に傷を5ヵ所負った)のように、場所を数える。

「匹」と馬との固定関係から分かるように、「冊」が本と、「艘」が船・艦と、「出」が戯と、「所」が学校・家屋と、「笔」が債・款と、「顶」が政策・議案と、「届」が会(議)と、「部」が本・戯劇と、「处」が房産・園林という固定された特定の組合せの制約関係に縛られることから、「冊、艘、出、所、笔、項、届、部、处」を「匹」と同じ個体量詞の類に入れるべきであると思われる。

他に、「令」は、印刷用紙500枚を「一令」とする名量詞で、「刀」も同じく紙100枚を「一刀」とする名量詞であるが、定量詞の定義「若干の人や事物の数量を表わし、またその量が不変である」から、定量詞のグループに入れるべきである。「刀」が名詞ではあるが、「切了一刀」(刃物で一きりした)のように、刀で切る回数を表わす借用動量詞としても使われる。

次に残された「卷」、「期」、「讲」については、個体量詞の「顶」と比較してみよう。「顶」が「两项帽子」(帽子2個)、「一项张篷」(テント一張)のように、てっぺんのあるものを数える名量詞に属する個体量詞である。また、頭や棒で下から押し上げるという意味の動詞であることから、「他向上顶了一项」(頭を上の方にちょっと突っ張りました)のように、頭で突き上げる回数を表わす動量詞でもある。「期」が定期刊行物の号数を表わす名量詞で、「暑假讲习班先后办了三期」(夏期講習会は前後3期行った)のように量詞にもなれる。「讲」は、「三讲课」(3コマの講義)のように、講義のコマ数を指す名量詞で、「与他讲三讲」(彼と3回交渉した)のように話の回数を表わす動量詞でもある。こう見ると「期」と「讲」が「顶」とはまったく同質のものであるから、「顶」と同じ個体量詞のグループに帰納させるべきである。

何傑が、専職量詞を説明したとき、「张」を「刀」と比較した。つまり、「刀」を量詞として「一刀钱」とは言わず、「一刀纸」のように、紙のみの量を表わす。すなわち、「刀」は紙の量を表わす専職量詞である。「张」は紙の量を表わすことが出来るが、「一张桌子、一张票、一张床、一张弓、一张关系网、一张地图」のように、「张」が職能上、数多くの客観的な事物の量を表わすから、専職量詞ではないと指摘した²¹⁾。そうであれば、「卷」が巻いた物を数えるときに「一卷纸」(紙一卷き)、「一卷纱布/绷带/布」(一卷きのガーゼ/包帯/布)、「一卷铺盖」(蒲団一卷き)に使われる名量詞で、または書籍の冊数又は篇章数「第一卷」(第1巻)、「卷二」(巻2)を表わすので、「张」と同じようにいくつかの種類の客観的な事物の量を表わすから、「张」と同じように、「卷」も専職量詞ではないことが言える。「卷」が表わす量は確定できないので、不定量詞の類に入れる

21) 前掲。『現代漢語量詞研究』, 37頁。

べきである。

このように検討してみると、専職量詞の存在する必要性はなくなる。専職量詞がなくなると、相対的に兼職量詞も存在する理由がなくなるではなかろうか。

何傑が、兼職量詞について「量詞内部における各種量詞の中で、二種、あるいは二種以上に属する量詞を兼職量詞という。量詞の分類は量詞の内部範囲に制限されるべきで、例えば、量詞として、又は名詞ととして用いられ、あるいはほかの品詞ともなれるものが兼職量詞と認められない。つまり、量詞の内部範囲において、例えば、大きな類別で名量詞に属し、また動量詞も兼担できるものや、小さな類別で名量詞内部の二種、あるいは二種以上に属すものや、または動量詞の中の二種、または二種以上に属すものを兼職量詞とみなす」²²⁾と説明した。次は、兼職量詞とされたものを一つ一つ確認しよう。

「把」は、1)「一把菜刀」(庖丁1挺)、「一把茶壺」(急須1個)のように、柄のあるものや取っ手のついている器物を数える。2)「一把米」(一にぎりの米)のように、一つかみを表わす名量詞で、または、1)「努一把力」(一がんばりする)のように、力・努力などに用いて、2)「拉他一把」(いっしょう引っ張ってやれ)、「连擲两把骰子」(さいころを続けて2回振った)のように手の動作を修飾する動量詞である。もちろん、「把」は持つ、握る、掴む、守るなどを意味する動詞で、またはハンドル、手押し車・自転車などの握りを表わす名詞でもある。何傑の理論では「把」は兼職量詞にはなれない。「拍」は名量詞として、「曲子一拍不能唱成半拍」(曲の一拍子を半拍子で歌ってはいけない)のように、音楽の拍子に用いるが、「突然把马一拍就走了」(馬をぱっと叩いて去った)、「两只膀子上，忽然吃人重重一拍」(両肩が突然他人に強く叩かれた)のように、動量詞として平手で叩く動きに用いる。しかし、「拍」は、主に手のひらで軽く叩く、撮影する、電報などを打つなどを意味する動詞として使われることから、「拍」も兼職量詞にはなれない。「顿」は名量詞として、「一天三顿饭」(1日3度の食事)のように、食事に用いて、「劝了他一顿」(彼に1度忠告した)、「被他说了一顿」(彼にひどく叱られた)のように動量詞として食事・叱責・忠告・漫罵等の動作の回数を表わすが、「短期间停止する」、「足でトントン踏む」などを意味する動詞でもあり、また「俄に、直ちに、忽ち」を意味する副詞でもある。つまり、「顿」も兼職量詞にはなれない。

ここで、「把」を個体量詞に入れてもよいし、不定量詞に入れてもよいし、やはり両方に個別に入れたほうが合理的である。「拍」が「頂」と同質であり、個体量詞に入れるべきで、「顿」を専用動量詞のままにしたほうが適当であろう。

「场」は、「大哭一场」(ひとしきりわめき泣く)、「训他一场」(彼をうんと叱った)のように、ある種の言葉や行為の経過を表わす動量詞で、「一场大战」(一場の激戦)、「一场灾难」(一つの災難)、「害了一场大病」(ひどい病気に見舞われた)のように、名量詞としても使われる。

22) 前掲。『現代漢語量詞研究』、48頁。

「阵」も「场」に似ており、「雨下了一阵又停了」(雨一しきり降ってからやんだ)、「走一阵歇一阵」(しばらく歩いてはちょっと休む)、「我的病好一阵坏一阵」(私の病気はよくなったりぶり返したりする)のように、一定の時間続く動作を数える動量詞で、「一阵冷风」(一しきりの冷たい風)、「响起了一阵枪声」(一しきりの銃声が聞こえた)のように、一定時間続く事物・現象を数える名量詞としても使われることから、「场」も「阵」も専用動量詞に入れるべきである。

「面」は顔を意味する名詞で、「一面镜子」(ひとつの鏡)、「两面国旗」(国旗2本)のように、平たいものを数える名量詞として使われることから個体量詞に入れ、または「见过一面」(1度あったことがある)のように、人と会う回数を表わす動量詞でもあるから、借用動量詞にもなれる。

「点儿」は数詞の「一」に限る「一点儿小事」(ほんのちょっとした事)、「一点儿纸」(紙少し)のように、少量のものを表わす名量詞で、またその量が確定できないことから名量詞の不定量詞に入れるべきである。

「些」も、(前に用いる数詞が「一」に限り、普通省略する)「一些甜瓜」(メロン少し)「一些人在看报」(一部の人は新聞を読んでいる)のように、事物や性状の数の特定できない少量であることを表わす名量詞で、「点儿」と同じ名量詞の不定量詞に入れるべきである。

「刀」は、前述したように、すでに不定量詞に入れてある。刀で切る回数を表わす「切了一刀」(刃物で一きりした)動量詞であるから、借用動量詞として使われる。

「篇」:「一篇论文」(1篇の論文)、「这本书缺了一篇儿」(この本が一葉抜けている)と、文章の1篇または紙や頁を指す名量詞。

「册」:「这套书一共六册」(この本が全部で6冊です)と、書籍をセットで数える名量詞。

「封」:「一封信」(手紙一通)と、手紙など封をしたものを数える名量詞。

「艘」:「五艘大船」(大船5隻)、「一〇艘军舰」(軍艦10隻)と、船を数える名量詞。

「丸」:「一次吃三丸」(1回に3粒飲む)と、丸薬を数える名量詞。

「挺」:「一挺机关枪」(機関銃一丁)と、機関銃を数える名量詞。

「页」:一般にはノートや本の紙の片面を指すが、印刷用語としては本の表裏一枚を指す名量詞。

「盏」:「一盏灯」(一つの灯)と、燈火を数える名量詞。

「栋」:「一栋房子」(家屋一棟)と、家屋を数える名量詞。

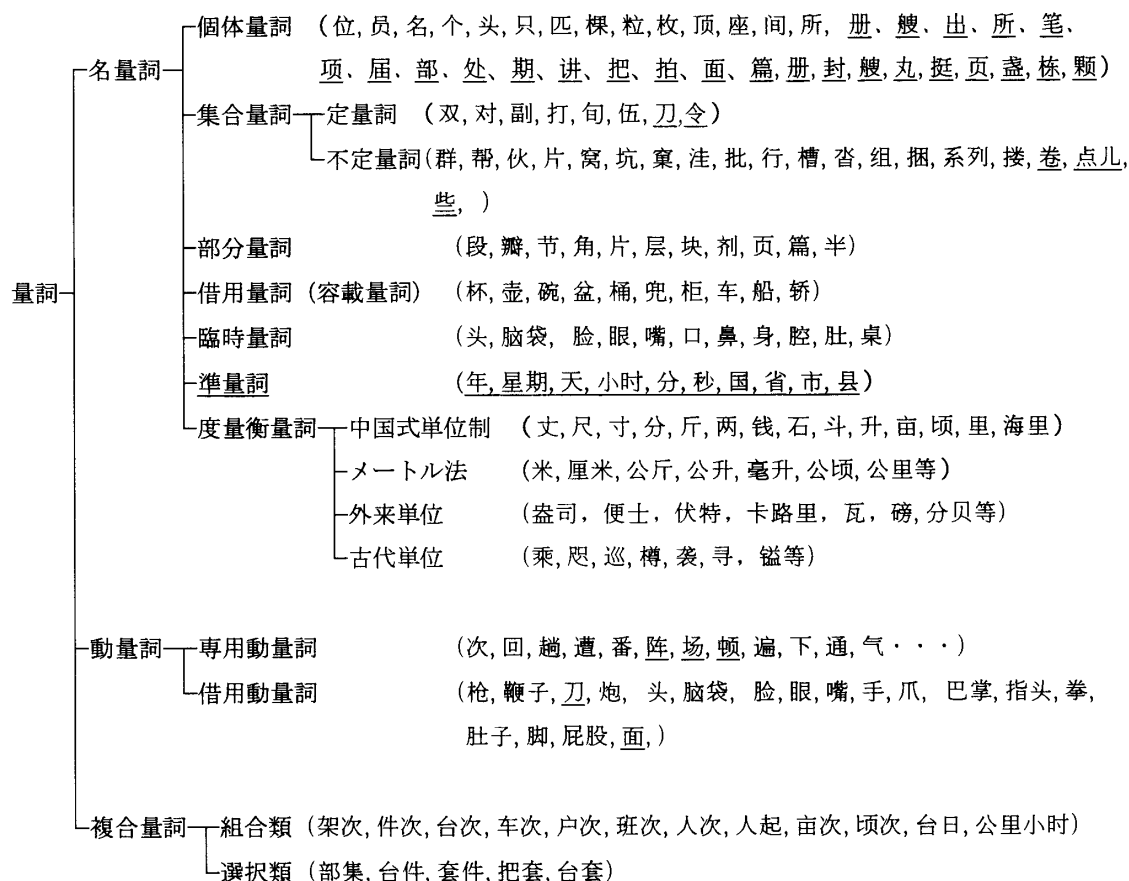
「颗」:「一颗珍珠」(一粒の真珠)、「三颗子弹」(銃弾3弾)、「一颗心」(一つの心)と、円状又は粒状のものを数える名量詞。

以上のような量詞が元々個体量詞で、相対的集合量に対して、事物の単独の数単位を表わすことから、やはり個体量詞に戻した方が混乱は少ない。

このようにして、量詞における第1次下位分類は、名量詞、動量詞、複合量詞の3項目に区分できて、より合理的で、すっきりするのではなかろうかと思われる。

次に、張志公と劉月華等の量詞に関する第二次分類を参考にして、何傑が言及していなかった準量詞を加えると、量詞の下位分類は図4のようになる。この一連の作業を通じて整理した結果、

中国語量詞の分類を一目瞭然に理解でき、内容としては量詞のほとんどを包括し、方言を使って、普通語（標準語）を学ぶ中国人、中国語と違った言語を使う少数民族、中国語を学ぶ外国人にとって、勉強しやすくなると思われる。



注：下線のある量詞が本稿の整理によるものである。

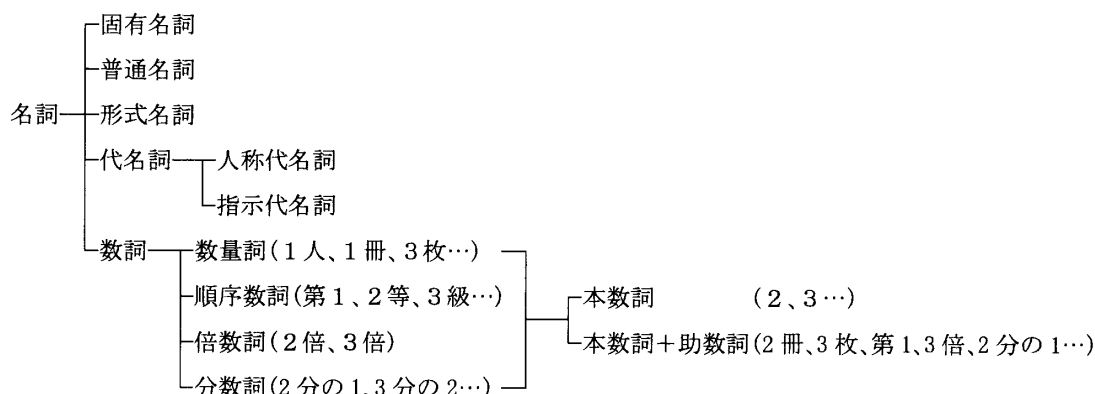
図4 量詞の下位分類

4. 日本語助数詞の分類

日本語の助数詞の本質について、名詞説、接辞説があるが、助数詞は数詞や、代名詞と同じように名詞として取り扱われている。それゆえ、日本語の助数詞の品詞論における位置を明らかにするために、まず名詞の下位分類を調べる必要がある。

寺村秀夫が指摘したように「一般に従来の国文法では名詞の下位分類について冷淡であったように見受けられる。形式名詞、数詞、時（の名）詞などを特有の文法的機能を持つものとして拾い上げることは通説といってもよいだろうが、一般には、[西洋文法においては普通名詞、固有名詞その他の分類が行われているが、このような分類は日本語では意味がない] という所で終わっている。併し私には、だからといってどんな分類も意味がないとは思われないのである」²³⁾。

本稿では、鈴木一雄研修『図説国語資料』の「名詞の種類」、「代名詞の種類」と、津之地直一の「上代語における数詞・助数詞の攷」における「数詞・助数詞とは」との両方を参考にして、名詞の下位分類を図5のように整理した²⁴⁾。この分類から分かるように、名詞の1次分類に属する数詞を2次分類した結果、「数詞＝本数詞＋助数詞」となる。それゆえ、数の観念を表わす「2」、「3」のみを数詞として、「冊」、「枚」、「倍」などを助数詞とする考え方と、数と助数詞を含めた全部を数詞とする考え方がある。



注：なお、名詞には転成名詞と複合名詞がある。

図5 日本語名詞の下位分類

もちろん、中国語では、数詞が名詞と同じように、品詞上においては同次元にある独立した品詞であり、量詞も同じである。ここで言えることは、日本語の数詞は名詞であって、名詞の2次分類に属す。特に日本語において、助数詞が認められながら、名詞として名詞の3次分類に入っている。つまり、日本語の助数詞は品詞論における地位がきわめて低いと言わざるをえない。

一体、日本語において助数詞はどのような定義を持っているであろうか。池上禎造は、「助数詞とは、接辞の一つ。ひとつ・ふたり・みっか・四箱・五棟・六皿・七本・八軒・九冊・十首などのように数詞に付属する接尾語をいう場合が多いが、『第一章』のような接頭語を除外する積極的な根拠は何も見当たらない。したがってそれも含めて、『数詞の構成要素となる接頭語および接尾語を助数詞という』と考えてよかろう」²⁵⁾と助数詞について説明した。

益岡隆志らが「名詞のうち数量を表わす名詞を〔数量名詞〕と呼ぶ。数量名詞には名詞単独で数量を表わすものと、〔数の名詞＋助数詞〕や〔指示詞＋ほど、くらい〕等のように、接尾辞や接尾辞的な語と組み合わせて初めて、数量名詞になるものがある。単独で数量を表わす名詞には、

23) 寺村秀夫「日本語名詞の下位分類」『日本教育』第12号、昭和43年10月、44頁。

24) 鈴木一雄研修『図説国語資料』東京法令出版、昭和54年1月、330頁。と津之地直一の「上代語における数詞・助数詞の攷」『愛知大学文学論叢』第26号、1964年、2頁～3頁を参考にして作成。

25) 池上禎造「助数詞」『日本文法大辞典』明治書院、昭和58年、331～332頁。

[大勢, 多く, 多数, 少数, いくらか, 大部分, 半分, 全部] 等がある。助数詞（II部 13章 3節 1参照）には, [本, 冊, 枚] のように, 数える対象の種類によって使い分けられる類別詞と, 数に付いて, 量, 回数, 時間等の様々な単位を表わすもの（単位辞）とがある」と指摘して²⁶⁾, 日本語の助数詞をより詳しく説明し, 助数詞の下位分類にまで言及した。益岡隆志らの助数詞に関する説明を参考にして, 助数詞の下位分類を図6のように整理できる。

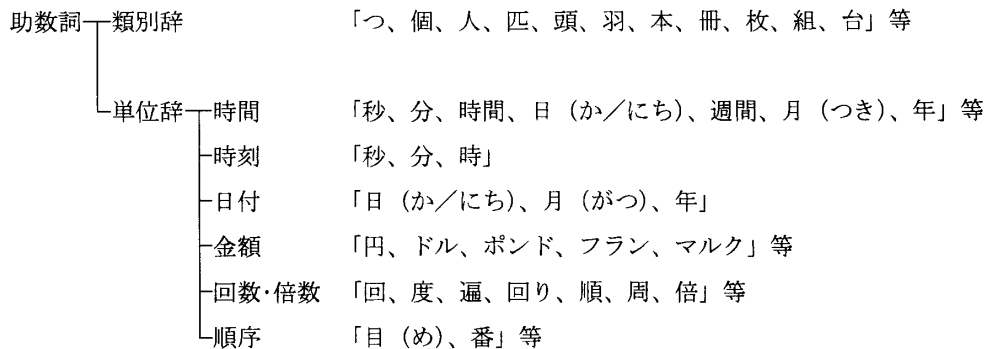


図6 益岡隆志・田窪行則における助数詞の下位分類

以上のことから, 日本語において, 数詞の関与する助数詞の一群があるという事実が広く認められていることが明白で, またそれが複雑に発達していることもいうまでもない。確かに, 日本語の助数詞には, 「ひとつ, ふたつ…」の「つ」, 「ひとり, ふたり」の「り」, 「三日, 四日」の「か」, 「坪」, 「組」などのような和語系の特有の助数詞以外に, 中国から伝わってきた漢語の量詞が圧倒的に多く, または「1カートン, 2ケース, 3ダース, 4パック」, 「グラム」, 「メートル」などの外来語のものも増えてきた。中国語に似たように, 事物の性質・種類・形状によって使い分けられる助数詞に, 回数, 量, 時間などの様々な単位を表わす助数詞を合わせると, その名称は複雑多様であり, 数も多い。

特に, 中国語の量詞と日本語の助数詞を比較して見ると, 日本語の助数詞において, 人間を数えるときに, 「ひとり, ふたり, 3人, 4人…」で表現し, 動物を数えるときには, 一般の動物(猿, 羊, うさぎ, ふな, めだか)を「匹」, 大型の動物(象, 鯨, 馬, 牛など)を「頭」, あるいは「匹」, 魚類を「尾」, 「本」, 昆虫類を「匹」, 鳥類を「羽」, 貝類を「個」で表現する。物品・物体を数えるときに, 一般的なもの・粒状のもの・長いもの・道具類・銃器・平面的なもの・機械類・器具・乗り物・建築物・事柄・物件などなどによって, 使われる助数詞が異なってくるという面では, 中国語の量詞と類似点が多い。

最も助数詞のついた広義の数詞は, その文法機能がいくつかに分化しているので, この点から助数詞を更に区分することができる。ここで, 日本語の助数詞分類を中国語の量詞分類と比較し

26) ²⁵⁾ 益岡隆志・田窪行則共著『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版, 1992年, 34頁～35頁。

ながら、日本語の助数詞分類を整理してみる。まず、日本語の助数詞を中国語の量詞と似たように分類できるという仮説に基づいて、整理していく。

日本語において、本数詞と助数詞をプラスした数詞の構文的役割について「名詞として主体や補足語の働きをしたり、『の』を伴って名詞を修飾したりするばかりでなく『リンを3つ買った』のように、述語の修飾語としても使われる」²⁷⁾という指摘がある。また、「広義の数詞(筆者:本数詞+助数詞を指す)は『2階に3人の学生がいる』というように機能上名詞に分類されるが、『学生が3人いる』、『本を10ページ読む』というように、呼応する名詞が主語か目的語になった場合、副詞的に働く。また、頻度を表わす『度』、『回』なども副詞的に働く(手紙を3回読んだ)」²⁸⁾と数詞の副詞的な働きを強調する指摘もある。

国立国語研究所による明治初期の新聞の調査では、249の助数詞があったという²⁹⁾。ここで、度量衡助数詞を除いて、『日本語助数詞の歴史的調査—近世書札を中心に』(三保忠夫著、風間書房、2000年1月1日発行)と『NHKことばのハンドブック』(NHK放送文化研究所著、日本放送出版社、1992年3月25日発行)の「助数詞・用例集」、または『日本語大辞典』(梅棹忠夫等著、講談社、1989年11月6日発行)を調べた結果に、筆者自身が平日に集めていた助数詞を合わせると、日本語における助数詞の数は180個に上る。

この助数詞180個を中国語量詞の下位分類に照らして、図7のように整理した。図6と比較してみると、日本語助数詞の下位分類に単位辞として順序を表わす助数詞が設けられているが、中国語量詞にはその項目がない。実は、中国語には、順序を表わす数詞は序数詞と呼ばれ、数詞に分類されている。また、数詞は量詞や名詞と同じく独立した品詞である。日本語において、順序を表わす数詞も序数詞と呼ばれるが、助数詞の類に入っている。助数詞は普通の名詞に伴ってその名詞で表わす事物の数量的側面を表わすか、あるいは動詞に伴って動作・行為の回数を表わすが、序数詞はむしろ普通の名詞として事物そのものを指示する。この点からすれば、「第1」「2等」「3級」「4番」「5軒目」などのような序数詞は、助数詞と区別すべきであるし、普通の名詞とも区別したほうがよいと思われる。

こうしたことで、日本語助数詞はまず、名詞に伴う助数詞として、名助数詞という大項目を立てることができる。その下位分類については、個体、集合、部分、借用、臨時、準的、度量衡という概念から、中国語の名量詞とほとんど同じように区分できる。

しかし、気になるのは、日本語において中国語量詞のように動詞に伴う動量詞を立てることができるかどうかということである。実際、日本語にも動き・行為の回数を表わす「動量詞」に相当するものが存在している。例えば、「沖縄に一度行った」、「この薬を一日三回飲む」、「社説を一

27) 前掲。『基礎日本語文法—改訂版—』、35頁。

28) 福地 務「数詞・助数詞」『日本語教育ハンドブック』大修館書店、1990年3月、362頁～365頁。

29) 国語学会『国語学大辞典』東京堂出版、昭和55年、518頁。

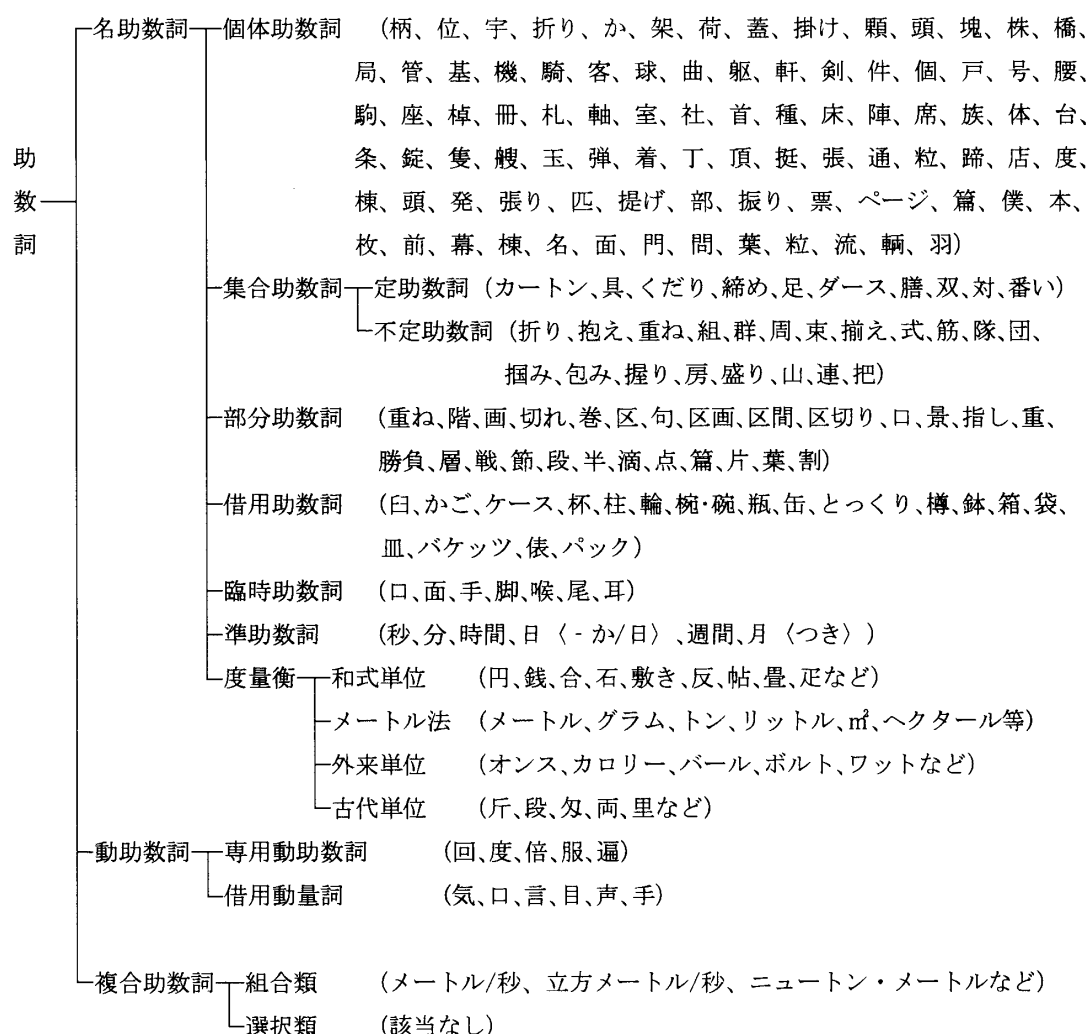


図7 本稿の日本語助数詞分類

通り読んだ」,「一服しよう」,「この映画を何遍も見た」などのように,「専用動量詞」に相当する「回,度,通り,服,遍」と,「一気に仕上げる」,「一口飲んで」,「一言いえ」,「一目見て気に入る」,「一声かける」,「一手遅れる」(囲碁)などのように,「借用動量詞」に相当する「気,口,言,目,声,手」がある。つまり,日本語助数詞には,中国語の動量詞に相当する動助数詞を立てることもできる。

他方,科学技術の進歩につれて,「メートル/秒」,「立方メートル/秒」,「ニュートン・メートル」のような複合助数詞が,空間と時間,力学,熱学,電子と磁気学,光学,音響学,物理学,化学など様々な分野で次々と出現し,無視できない状態にある。これは,日本語助数詞に複合助数詞を立てる時期がすでに到来していることを意味している。この点からすれば,日本語助数詞を第1次下位分類として,名助数詞,動助数詞,複合助数詞の3種に区分でき,第2次分類を含めて図7のように,中国語と対等的に整理できる。

5. ま と め

中国語において、『馬氏文通』が発表してから、1930年代、50年代における語法界の品詞分類についての大論争を経て、半世紀の間、量詞に関する16種類の名称が提出され、1950年代半ばで正式に量詞が認められ、それが1970年代になってようやく人々に受け入れられた。

日本語において、数詞の関与する助数詞の一群があるという事実が認められ、またそれが複雑に発達しているにもかかわらず、それが名詞の3次分類に属していることから分かるように、日本語の助数詞は品詞論における地位がきわめて低いと言わざるをえない。

本稿では、名詞に伴う助数詞と動詞に伴う助数詞の二つの観点から、日本語助数詞の下位分類についての整理を試みた。つまり、日本語助数詞が中国量詞と対等的に分類されることが可能である。

日本語はアルタイ語族に属すと主張する学者がいるが、そうでないと主張する学者もいる。いずれにせよ、日本語は中国と別系統であることは確かである。中国語は独立語で、日本語は膠着語であり、また両言語の語順も違う。そうしたことから、助数詞の使用においても、違いが出てくると思われるが、助数詞の分類には根本的な支障がないと思う。

以上の考察は、主に日常気づいた言語現象をまとめたものに過ぎず、偏った見方や見落とししたところもあるかと思うが、意味上、方法論などさまざまな点で、御先学のご批判、ご指摘を頂ければ幸甚である。

参 考 文 献

1. 馬建忠『馬氏文通』, 商務印書館, 1983年。
2. 黎錦熙『新著国語文法』, 商務印書館, 1992年。
3. 王力『中国現代語法』, 商務印書館, 1985年。
4. 呂叔湘『中国文法要略』, 商務印書館, 1982年。
5. 呂叔湘『語法學習』, 中国青年出版社, 1953年。
6. 郭紹虞『中国語語法修飾新探』(上冊), 商務印書館, 1979年。
7. 三保忠夫『日本助数詞の歴史的研究』風間書房, 2000年。
8. 松村明『日本文法大辞典』明治書院, 昭和46年。
9. 林 巨樹「品詞」『国語学研究事典』, 明治書院, 昭和58年。
10. 朱德熙『語法講義』, 商務印書館, 2000年。
11. 呂叔湘『現代漢語八百詞』, 商務印書館, 1980年。
12. 黎錦熙, 劉世儒『中国語語法教材』(第二篇), 商務印書館, 1959年。
13. 張志公主編『現代漢語』, 人民出版社, 1982年。
14. 劉月華等『實用現代漢語語法』, 商務印書館, 2001年。
15. 何傑『現代漢語量詞研究』, 民族出版社, 2000年。
16. 寺村秀夫「日本語名詞の下位分類」『日本教育』第12号, 昭和43年10月。
17. 鈴木一雄研修『図説国語資料』東京法令出版, 昭和54年1月。

18. 津之地直一の「上代語における数詞・助数詞の攷」『愛知大学文学論叢』第26号, 1964年。
19. 池上禎造「助数詞」『日本文法大辞典』明治書院, 昭和58年。
20. 益岡隆志・田窪行則共著『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版, 1992年。
21. 鈴木重幸『日本語文法・形態論』むぎ書房, 1986年。
22. NHK放送文化研究所著「助数詞・用例集」『NHKことばのハンドブック』日本放送出版社, 1992年3月。
23. 梅棹忠夫等著『日本語大辞典』講談社, 1989年11月。
24. 沖久雄「数詞・助数詞の文法」『日本語学』第5巻第8号, 1986年。
25. 見坊豪紀「現代の助数詞」『言語生活』第166号, 1965年7月。
26. 文化庁『外国人のための基本語用例字典第2版』大蔵省印刷局, 昭和58年8月。
27. 成田徹男「名詞と同形の助数詞」『都大論究』第27号, 1990年。
28. 森重敏「数詞とその語尾としての助数詞」『京都大学国語国文』第27巻第12号。
29. 長谷川重和「数量詞の修飾について」『日本語・日本文化』第20号, 1994年。
30. 奥津敬一郎「数量詞移動再論」『東京都立大学人文学報』第160号, 1983年。
31. 買買提・力提甫「ロシア語の助数詞について—日本語と比較して—」『北見大学論集』第39号, 1998年。